



赤羽別院報 第38号

発行所 真宗大谷派 赤羽別院 親宣寺

〒444-0427 愛知県西尾市一色町赤羽上郷中14

Tel・Fax (0563) 72-2308

Eメール Akabane\_betuin@katch.ne.jp

# 「楽」について



たが、楽になつた手ごたえがないといふことはないでしようか。親鸞聖人が何度も伝えてくださる「楽と私どもが言っている楽は、いささか違うような感じがいたします。

**苦楽**

「苦楽」といいますように、「楽は苦」に対する言葉です。皆が求め欲しがるものであり、楽しいといふことです。しかし、どのようになることが「楽」なのかというところが、どつぱりしていません。正信偈のなかにも「信楽」や「安楽」など「楽」といふ言葉が八回出てきます。文字数の限られた正信偈に、親鸞聖人が何度も同じ文字を出されていることは、やはり、そこに思いがあり「楽」といふ言葉によって伝えたいことがあったに違いないと思ひます。

私たちが、常に苦しみから逃れたいと思ひ、楽を求めたいわけですが、昔と比べると、毎日の生活も経済的には格段に楽になり、車や電話も一人一台という時代になりました。たしかに楽にはなりまし

**押しいただく**

私が生れた時代には、ほとんどの家に電化製品はありませんでした。ですから、私が小学生のころ、扇風機が家に来た日や、テレビが来て画面に写る映像をはじめて見た時のことはよく覚えております。娘が幼なかつた頃、寝る前に読み聞かせをしていて、本の中にあつたカラーテレビという言葉に「カラーテレビって何？」と聞きました。カラーテレビを見たことがないのならともかく、ふだん見ているのになぜかと思ひました。モノクロテレビを見たことがないものにとっては、わざわざカラーテレビという言い方がしてあるのが不思議なものでした。

なかつた時を知らないものにとつては、あることがどれほどのことが解らないといふことがあります。

**苦の中にある「楽」**

一つ一つの付き合いもそうです。地域や親戚とのつながりも面倒だからやめておこう。盆や正月あるいは法事などの付き合いも面倒だからやめてしまおうといふことになれば、確かに楽にはなりますが、何か薄っぺらな感じがいたします。これは他人事ではなく、お寺についてもそうです。私がお参りに行きますと、割烹着姿の人が庭で立ち話をしたり、煮炊きをしたり、話し声や料理の匂いがし、その家の門を入るともう法事が始つていたのです。はじめて参ってお宅でも直ぐにその場所が解つたのですが、今では、お宅の玄関を開けるまで解らないような状況です。

お寺の報恩講についても同様で、勤める日数を減らしたり、お斎を惣菜屋さんに頼んだりするところもあります。お手伝いをお願いする主婦階級が上つていくと嬉しい。

**三楽**

では、お聖教ではどのような説かれていたのかということですが「外楽」「内楽」「法楽」といふ言葉があります。

「外楽」とは、眼・耳・鼻・舌・身の五識を感じる楽です。きれいな景色を見て楽しい。美味しいものを食べて楽しいなど、これは解りやすいと思ひます。

「内楽」とは、習い事をして階段が上つていくと嬉しい。

**願ひとしての「楽」**

私のお寺では日曜学校を開いていて、そこで子どもたちに短い作文を書いてもらうことがあるのですが、敬老の日のころに「おじいちゃんやおばあちゃんがいい顔をしていて」といふ題で書いてもらったことがあります。お酒を飲んでいて、カラオケを歌っている時といった文章が多いなかで、私の家に畑で採れた野菜を持つてきてくれる時と書いた子がいました。子どもはよく見ているなと思ひました。こちらから何かをあげると喜ぶというのはなく、自分が苦勞して作った野菜をもらつてもらうのが嬉しいのです。

みなさんも同じようなことはありませんか。損をしないように、苦勞しないようにという生活のなかから出てくる楽ではなく、たとえ苦勞しても命が終る時に、いい一生を送らせていただいたと思ひえる「楽」です。

多くのお聖教で、この「楽」が「わがが」といふ意味で使われています。私たちがの深い願いを言い当てる表現としての言葉です。願ひがはつきりすることが「楽」なのです。

私たちは、面白おかしいことが楽なのだと思ひ込んでおりますが、今晩何が食べたのかという目先の願ひではなく、一生をおとすの願ひがはつきりすることが「楽」ではないでしょうか。

いつ死んでもいいという。こととは、早く死にたいということとは違ひます。一日一日を喜べたら、いつ死んでもいい。いつまで生きてもありがたいということですね。

その生きることを支えるほどの願ひが、はつきりすることと「楽」なのでしょう。

平成25年10月16日  
赤羽別院報恩講  
松林 了師法話要旨

そのような一つ一つのありがたが解らなければ、何を便利にしたところで、ありがたみは解らないと思ひます。「今あるものを押しつた」といふことさえあれば、今何が手に入らんとて、その人の人生は豊かだ」といふ言葉を教えたいただきました。この押しつたこと自体が解らなくなつていけば「その人の人生は貧しい」のではな

の皆さん方が、パートなどの仕事をしておられ、頼みにくい状況になっていまして。しかし、楽ができて皆さん喜ばれるかという、苦勞なくしてお迎えした報恩講はお参りが激減していきま

お磨きやお華からお斎の準備まで苦勞して迎えた報恩講は、今年も迎えてさせていただきますという報恩講です。楽ですと、その感激は薄くなつていきます。

苦しいのは嫌だから楽なやり方にしたと思う。感覚的にはそのとおりなのでしょうが、決して腹の底から楽になつていらないと思ひます。

**講師プロフィール**

松林 了 (まつばやし ざとる)

1951 (昭和26) 年生まれ  
大谷大学大学院 修士課程 (仏教学専攻) 修了  
元 教学研究部 助手  
現 安城市 西岸寺住職

庭掃除は大嫌ひでも、きれいな部屋は努力するのは嫌ひですが、努力をすれば、したことを自慢する。不思議なものです。そういう心を持っていきます。

「法楽」は、仏の功徳を愛することより起つてくる「楽」です。つまり、私の考えから出てこない「楽」です。ですから、仏より戴く「楽」だから凡夫の私たちには解らないかというところでなく、私たちが深いところで喜ばせてもらえる「楽」。生きている心の支えとなるような「楽」です。

自利利他という言葉は、私たちが得をするのが楽だと思ひがちですが、よくよく考えてみると、そんな私にも自分の行いによって他人が喜んでくれる、よかつたと思ひ心があつたのです。この心が抜けると、歯止めなく薄っぺらな生き方になつていくしかないので、これは、内

<b>春季彼岸会</b> 3月20日(木) 午後1時 法話 第23組 願正寺 鶴見 幹師	<b>3月21日(金) 午後1時</b> 法話 第14組 安壽寺 安藤 智彦師	<b>3月22日(土) 午後1時</b> 法話 第8組 安樂寺 伊奈 恵祐師	<b>3月20日(木) 午後3時30分 (彼岸会終了後)</b> 鈴木君代&天白真央 ギター&シンセサイザー合奏と歌	<b>真宗講座</b> テーマ「正信偈に学ぶ」 第3回 3月25日(火)午後2時~4時30分 講師 大谷大学名誉教授 古田 和弘師	<b>報徳会</b> 4月11日(金) 午後1時 法話 第20組 淨教寺 鈴木 誓師	<b>殉教記念法要</b> 6月5日(木) 午後1時 本山鎌倉御参修 法話 未定	<b>夏の御文</b> 7月15日(火) 午後1時 法話 未定	<b>晨朝法話</b> 3月13日(木) 第10組 榮安寺 藤井 明敏師 3月28日(金) 同 香嚴寺 鈴木 士平師 4月13日(日) 第11組 唯信寺 大河内和也師 4月28日(月) 同 惠琳寺 小栗 勉師 5月13日(火) 第12組 篤信寺 笹川 陸師 5月28日(水) 同 蓮光寺 藤澤 康秀師 6月13日(金) 第13組 慶徳寺 法輪 篤師 6月28日(土) 同 教養寺 間島 享師
--	--	---	--	--	--	---	---------------------------------------	---

**別院行事のご案内**



### 伝統を現代に

#### お経・正信偈の心を子や孫にわかる言葉で

本年2月18日、赤羽別院に岡崎教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法会讃仰講演会が開催され、講師として御遠忌法会のパネリストである戸次公正氏をお迎えした。戸次氏は大阪教区南瀬寺の住職であり、法事や葬儀の場で日本語に訳したお経やお聖教の朗読をすることで、その意味をわかりやすく伝える取り組みをされている。戸次氏は「お経やお聖教の本質を伝えていくには、仏事の形を変えていく必要があるのではないかとお経を朗読する意義を話され、日本語訳された阿弥陀経や正信偈を朗読された。



満堂の聴講者



### 真宗講座

#### 「正信偈」に学ぶ

大寒に入った1月21日、赤羽別院では平成25年度の第一回真宗講座が開催され、大勢の方々が参加した。この講座は、古田先生の正信偈の講義を希望される多くの方々の要望に応え、3年前に始まった。真宗門徒にとって最も身近にある正信偈には何が書かれているのか、親鸞聖人は私たちに何を伝えたかったのかを学ぼうと、崇敬区域外からの受講者の姿も見ることができた。先生は正信偈の講成と内



め直し大乗の菩薩の完成すべき知慧(般若)を明らかにしたと話された。また、講義の中では、先生独特の真面目な顔にユーモアあふれる笑顔で、ジョークや興味深い比喩が語られた。その中には、仏教と龍宮城の関係や雨についての話もあった。「雨にはいい雨も悪い雨もない。それを決めてあげているのは我々の都合であって、雨に失礼である。」(笑)。

ご存知ですか？本山・東本願寺では、除夜の鐘・初鐘は撞かれておりません。これは「この一年の間の己が身上の全ての出来事を受け止めて前向きに生きる」という真宗の教えの現れです。大晦日に、全国の別院や崇敬寺院で厳かに鳴り響く鐘の音は、古くから受け継がれた慣例といわれています。穏やかな天候に恵まれた大晦日には、当別院にも家族連れをはじめ大勢の方々が訪れ、その音が二里四方に響き渡る

「二年の計は元旦にあり」といわれますが、「親鸞聖人のみ教えに対する仏恩報謝の計は修正会にあり」であります。和讃を初讀に、お文は一帖目に戻すお元日を迎え、厳かに修正会が営まれた。動行に続いて輪番の新年挨拶では「皆さんに愛され親しまれてきた永い歴史を誇る赤羽別院は、地域の寺院をはじめ皆様の並々ならぬご協力と維持・相続され今日に至った」と感謝の意が顕された。法話では、輪番が昨年訪問

されたラオスでの仏教徒のようすを話された後、庫裏に移って恒例となっているお節料理をいただいた。

古田先生の真宗講座は、今後も継続する予定となっております。次回以降も大勢の方が受講されますように願います。

といわれる大鐘を撞いた後、温かいぜんざいと甘酒に舌鼓を打ち、笑顔で新年の挨拶を交わす光景がみられました。

多くの人の心にとって仏縁を戴くもっとも大きな機会が葬儀の場であるだろう。しかし時代のなかで葬儀は簡素化の道をたどり、いまでは通夜や告別式などを行わない「直葬」も、都心部では、そう珍しくないことではなくなってきたという。

こうした葬制の崩壊の危機に思いを寄せた僧侶らによって、崇敬区域内の組や寺院でも、近年わずかながらあるが、幾つかの活動がなされるようになってきている。

去る2月19日、当別院に於いて開かれた「声明儀式作法研修会」も、その一つと言えるかもしれない。

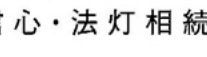
講師に、前堂衆一鷹の菅生考純師をお招きし、「葬儀のお勤め」をテーマに、儀式執行の姿勢や作法について指導いただいた。

はじめに、日本の葬制史の

大きな流れをつかむ講義があり、その後、長い時間を割いて、そうした歴史を経て形となった現代の大谷派の葬儀の、実践的な指導があった。

「儀式」という考えを「荘厳」という考えに変えていってほしい、と語る師の言葉を、どう受け止め、いかに表現して行くか。参加者それぞれに課題が与えられた貴重な集いであったように思われる。

熱心な研修



青空市場に届く野菜

あるお母さんは「子どもに健康な赤ちゃんを生んでもらいたい、それが今、私の生きる力です」と話され、一同涙の出る思いであった。

二日目は、南相馬市にある原町別院で院代木ノ下秀昭氏より別院の歴史と、原発から23km地点にある南相馬市の現状をお聞きした。氏の「子どものいない町に復興などない」との言葉に、真の復興とは何かを教えられた。

最後は、真行寺住職佐々木氏の「福島を忘れないで下さい」を胸に福島をあとにした。

「わすれまい福島」

岡崎教区 2013年度「原発問題学習会」

立春も過ぎた、2月6・7日、原発事故から3年目を向かえようとする今、「原発問題学習会」が被災地において開催され、教区から19名が参加した。

今もおお、放射能汚染の中での生活を余儀なくされている人々の声を聞く中で、私たちにできることは何か、共に原発問題を学ぶ機会とした。

一日目は、二本松市の真行寺を訪れ「放射能から子どもたちを守りたい」そんな思いのお母さんたちの集まり、「ハレンジャー」の方からお話を聞いた。

汚染されていない安全な野菜を定期的に提供する青空市場の開催や、除染作業など、みな悲しみ、絶望の中でも仲間との絆で力強く活動されていた。子ども達は未だに屋外での遊びはできず、食品を見れば「お母さん、これ毒入っていない？」と聞く、そして、

「お経やお聖教の本質を伝えていくには、仏事の形を変えていく必要があるのではないかとお経を朗読する意義を話され、日本語訳された阿弥陀経や正信偈を朗読された。

質疑応答の時間では、普段の法事の式次第や、寺を身近に感じてもらう

去る1月25日に安城市歴史博物館にて第4回松平シノブジウムが開催された。今回は、三河一向一揆を題材に勃発から450年を経て改めてその本質を問う検証研究を各々の立場・視点で問題提起がなされた。

まず、東京都立大学名誉教授の峰岸純夫氏が三河一向一揆の発生事情や当時、矢作川流域に勢力を張っていた石川一族との関連について記念講演を行った。続いて、3名のパネリストが基調報告を提言された。

中京大学教授の村岡幹生氏は徳川家康の立場から一揆を考察し、同朋大学准教授の安藤弥弥氏は三河本願寺教授の「寺内」の研究を中心とした歴史像の検証を課題とされた。

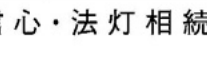
大谷大学講師の川端泰幸氏は織田信長側の視点で、石山合戦期の一向一揆観を

検討し戦国一揆と権力者の特性を語られた。各々持ち時間が20分という短かい時間であったが、中味の濃い内容であり、見方によって各々の一揆論の違いがよくわかった。

休憩をはさんでのシノブジウムでは質疑応答を含め活発な意見が交わされるなど熱気あふれるものとなった。

会場となったエントランスホールには約250名の聴衆であふれ、三河一向一揆に寄せる関心の高さをうかがわれた。峰岸氏の「歴史はドラマ制作とは違いますが、あくまでも史実となる史料に基づき、ていねいに掘り下げて研究することに尽きます。」と最後に結ばれた一言が印象的であった。

展示場のようす



展示場のようす

三州に一揆おこりもうす

三河一向一揆450年

去る1月25日に安城市歴史博物館にて第4回松平シノブジウムが開催された。

今回は、三河一向一揆を題材に勃発から450年を経て改めてその本質を問う検証研究を各々の立場・視点で問題提起がなされた。

まず、東京都立大学名誉教授の峰岸純夫氏が三河一向一揆の発生事情や当時、矢作川流域に勢力を張っていた石川一族との関連について記念講演を行った。

続いて、3名のパネリストが基調報告を提言された。

中京大学教授の村岡幹生氏は徳川家康の立場から一揆を考察し、同朋大学准教授の安藤弥弥氏は三河本願寺教授の「寺内」の研究を中心とした歴史像の検証を課題とされた。

大谷大学講師の川端泰幸氏は織田信長側の視点で、石山合戦期の一向一揆観を

検討し戦国一揆と権力者の特性を語られた。

各々持ち時間が20分という短かい時間であったが、中味の濃い内容であり、見方によって各々の一揆論の違いがよくわかった。

休憩をはさんでのシノブジウムでは質疑応答を含め活発な意見が交わされるなど熱気あふれるものとなった。

会場となったエントランスホールには約250名の聴衆であふれ、三河一向一揆に寄せる関心の高さをうかがわれた。

峰岸氏の「歴史はドラマ制作とは違いますが、あくまでも史実となる史料に基づき、ていねいに掘り下げて研究することに尽きます。」と最後に結ばれた一言が印象的であった。

修正会・初鐘

「二年の計は元旦にあり」といわれますが、「親鸞聖人のみ教えに対する仏恩報謝の計は修正会にあり」であります。

和讃を初讀に、お文は一帖目に戻すお元日を迎え、厳かに修正会が営まれた。

動行に続いて輪番の新年挨拶では「皆さんに愛され親しまれてきた永い歴史を誇る赤羽別院は、地域の寺院をはじめ皆様の並々ならぬご協力と維持・相続され今日に至った」と感謝の意が顕された。

法話では、輪番が昨年訪問

されたラオスでの仏教徒のようすを話された後、庫裏に移って恒例となっているお節料理をいただいた。

古田先生の真宗講座は、今後も継続する予定となっております。次回以降も大勢の方が受講されますように願います。

といわれる大鐘を撞いた後、温かいぜんざいと甘酒に舌鼓を打ち、笑顔で新年の挨拶を交わす光景がみられました。

多くの人の心にとって仏縁を戴くもっとも大きな機会が葬儀の場であるだろう。しかし時代のなかで葬儀は簡素化の道をたどり、いまでは通夜や告別式などを行わない「直葬」も、都心部では、そう珍しくないことではなくなってきたという。

こうした葬制の崩壊の危機に思いを寄せた僧侶らによって、崇敬区域内の組や寺院でも、近年わずかながらあるが、幾つかの活動がなされるようになってきている。

去る2月19日、当別院に於いて開かれた「声明儀式作法研修会」も、その一つと言えるかもしれない。

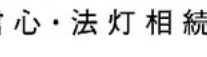
講師に、前堂衆一鷹の菅生考純師をお招きし、「葬儀のお勤め」をテーマに、儀式執行の姿勢や作法について指導いただいた。

はじめに、日本の葬制史の

大きな流れをつかむ講義があり、その後、長い時間を割いて、そうした歴史を経て形となった現代の大谷派の葬儀の、実践的な指導があった。

「儀式」という考えを「荘厳」という考えに変えていってほしい、と語る師の言葉を、どう受け止め、いかに表現して行くか。参加者それぞれに課題が与えられた貴重な集いであったように思われる。

熱心な研修



熱心な研修

青空市場に届く野菜

あるお母さんは「子どもに健康な赤ちゃんを生んでもらいたい、それが今、私の生きる力です」と話され、一同涙の出る思いであった。

二日目は、南相馬市にある原町別院で院代木ノ下秀昭氏より別院の歴史と、原発から23km地点にある南相馬市の現状をお聞きした。氏の「子どものいない町に復興などない」との言葉に、真の復興とは何かを教えられた。

最後は、真行寺住職佐々木氏の「福島を忘れないで下さい」を胸に福島をあとにした。

「わすれまい福島」

岡崎教区 2013年度「原発問題学習会」

立春も過ぎた、2月6・7日、原発事故から3年目を向かえようとする今、「原発問題学習会」が被災地において開催され、教区から19名が参加した。

今もおお、放射能汚染の中での生活を余儀なくされている人々の声を聞く中で、私たちにできることは何か、共に原発問題を学ぶ機会とした。

一日目は、二本松市の真行寺を訪れ「放射能から子どもたちを守りたい」そんな思いのお母さんたちの集まり、「ハレンジャー」の方からお話を聞いた。

汚染されていない安全な野菜を定期的に提供する青空市場の開催や、除染作業など、みな悲しみ、絶望の中でも仲間との絆で力強く活動されていた。子ども達は未だに屋外での遊びはできず、食品を見れば「お母さん、これ毒入っていない？」と聞く、そして、

「お経やお聖教の本質を伝えていくには、仏事の形を変えていく必要があるのではないかとお経を朗読する意義を話され、日本語訳された阿弥陀経や正信偈を朗読された。

質疑応答の時間では、普段の法事の式次第や、寺を身近に感じてもらう

去る1月25日に安城市歴史博物館にて第4回松平シノブジウムが開催された。

今回は、三河一向一揆を題材に勃発から450年を経て改めてその本質を問う検証研究を各々の立場・視点で問題提起がなされた。

まず、東京都立大学名誉教授の峰岸純夫氏が三河一向一揆の発生事情や当時、矢作川流域に勢力を張っていた石川一族との関連について記念講演を行った。

続いて、3名のパネリストが基調報告を提言された。

中京大学教授の村岡幹生氏は徳川家康の立場から一揆を考察し、同朋大学准教授の安藤弥弥氏は三河本願寺教授の「寺内」の研究を中心とした歴史像の検証を課題とされた。

大谷大学講師の川端泰幸氏は織田信長側の視点で、石山合戦期の一向一揆観を

検討し戦国一揆と権力者の特性を語られた。

各々持ち時間が20分という短かい時間であったが、中味の濃い内容であり、見方によって各々の一揆論の違いがよくわかった。

休憩をはさんでのシノブジウムでは質疑応答を含め活発な意見が交わされるなど熱気あふれるものとなった。

会場となったエントランスホールには約250名の聴衆であふれ、三河一向一揆に寄せる関心の高さをうかがわれた。

峰岸氏の「歴史はドラマ制作とは違いますが、あくまでも史実となる史料に基づき、ていねいに掘り下げて研究することに尽きます。」と最後に結ばれた一言が印象的であった。

修正会・初鐘

「二年の計は元旦にあり」といわれますが、「親鸞聖人のみ教えに対する仏恩報謝の計は修正会にあり」であります。

和讃を初讀に、お文は一帖目に戻すお元日を迎え、厳かに修正会が営まれた。

動行に続いて輪番の新年挨拶では「皆さんに愛され親しまれてきた永い歴史を誇る赤羽別院は、地域の寺院をはじめ皆様の並々ならぬご協力と維持・相続され今日に至った」と感謝の意が顕された。

法話では、輪番が昨年訪問

されたラオスでの仏教徒のようすを話された後、庫裏に移って恒例となっているお節料理をいただいた。

古田先生の真宗講座は、今後も継続する予定となっております。次回以降も大勢の方が受講されますように願います。

といわれる大鐘を撞いた後、温かいぜんざいと甘酒に舌鼓を打ち、笑顔で新年の挨拶を交わす光景がみられました。

多くの人の心にとって仏縁を戴くもっとも大きな機会が葬儀の場であるだろう。しかし時代のなかで葬儀は簡素化の道をたどり、いまでは通夜や告別式などを行わない「直葬」も、都心部では、そう珍しくないことではなくなってきたという。

こうした葬制の崩壊の危機に思いを寄せた僧侶らによって、崇敬区域内の組や寺院でも、近年わずかながらあるが、幾つかの活動がなされるようになってきている。

去る2月19日、当別院に於いて開かれた「声明儀式作法研修会」も、その一つと言えるかもしれない。

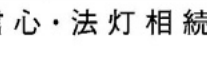
講師に、前堂衆一鷹の菅生考純師をお招きし、「葬儀のお勤め」をテーマに、儀式執行の姿勢や作法について指導いただいた。

はじめに、日本の葬制史の

大きな流れをつかむ講義があり、その後、長い時間を割いて、そうした歴史を経て形となった現代の大谷派の葬儀の、実践的な指導があった。

「儀式」という考えを「荘厳」という考えに変えていってほしい、と語る師の言葉を、どう受け止め、いかに表現して行くか。参加者それぞれに課題が与えられた貴重な集いであったように思われる。

熱心な研修



熱心な研修

青空市場に届く野菜

あるお母さんは「子どもに健康な赤ちゃんを生んでもらいたい、それが今、私の生きる力です」と話され、一同涙の出る思いであった。

二日目は、南相馬市にある原町別院で院代木ノ下秀昭氏より別院の歴史と、原発から23km地点にある南相馬市の現状をお聞きした。氏の「子どものいない町に復興などない」との言葉に、真の復興とは何かを教えられた。

最後は、真行寺住職佐々木氏の「福島を忘れないで下さい」を胸に福島をあとにした。

「わすれまい福島」

岡崎教区 2013年度「原発問題学習会」

立春も過ぎた、2月6・7日、原発事故から3年目を向かえようとする今、「原発問題学習会」が被災地において開催され、教区から19名が参加した。

今もおお、放射能汚染の中での生活を余儀なくされている人々の声を聞く中で、私たちにできることは何か、共に原発問題を学ぶ機会とした。

一日目は、二本松市の真行寺を訪れ「放射能から子どもたちを守りたい」そんな思いのお母さんたちの集まり、「ハレンジャー」の方からお話を聞いた。

汚染されていない安全な野菜を定期的に提供する青空市場の開催や、除染作業など、みな悲しみ、絶望の中でも仲間との絆で力強く活動されていた。子ども達は未だに屋外での遊びはできず、食品を見れば「お母さん、これ毒入っていない？」と聞く、そして、

「お経やお聖教の本質を伝えていくには、仏事の形を変えていく必要があるのではないかとお経を朗読する意義を話され、日本語訳された阿弥陀経や正信偈を朗読された。

質疑応答の時間では、普段の法事の式次第や、寺を身近に感じてもらう

去る1月25日に安城市歴史博物館にて第4回松平シノブジウムが開催された。

今回は、三河一向一揆を題材に勃発から450年を経て改めてその本質を問う検証研究を各々の立場・視点で問題提起がなされた。

まず、東京都立大学名誉教授の峰岸純夫氏が三河一向一揆の発生事情や当時、矢作川流域に勢力を張っていた石川一族との関連について記念講演を行った。

続いて、3名のパネリストが基調報告を提言された。

中京大学教授の村岡幹生氏は徳川家康の立場から一揆を考察し、同朋大学准教授の安藤弥弥氏は三河本願寺教授の「寺内」の研究を中心とした歴史像の検証を課題とされた。

大谷大学講師の川端泰幸氏は織田信長側の視点で、石山合戦期の一向一揆観を

検討し戦国一揆と権力者の特性を語られた。

各々持ち時間が20分という短かい時間であったが、中味の濃い内容であり、見方によって各々の一揆論の違いがよくわかった。

休憩をはさんでのシノブジウムでは質疑応答を含め活発な意見が交わされるなど熱気あふれるものとなった。

会場となったエントランスホールには約250名の聴衆であふれ、三河一向一揆に寄せる関心の高さをうかがわれた。

峰岸氏の「歴史はドラマ制作とは違いますが、あくまでも史実となる史料に基づき、ていねいに掘り下げて研究することに尽きます。」と最後に結ばれた一言が印象的であった。

修正会・初鐘

「二年の計は元旦にあり」といわれますが、「親鸞聖人のみ教えに対する仏恩報謝の計は修正会にあり」であります。

和讃を初讀に、お文は一帖目に戻すお元日を迎え、厳かに修正会が営まれた。

動行に続いて輪番の新年挨拶では「皆さんに愛され親しまれてきた永い歴史を誇る赤羽別院は、地域の寺院をはじめ皆様の並々ならぬご協力と維持・相続され今日に至った」と感謝の意が顕された。

法話では、輪番が昨年訪問

されたラオスでの仏教徒のようすを話された後、庫裏に移って恒例となっているお節料理をいただいた。

古田先生の真宗講座は、今後も継続する予定となっております。次回以降も大勢の方が受講されますように願います。

といわれる大鐘を撞いた後、温かいぜんざいと甘酒に舌鼓を打ち、笑顔で新年の挨拶を交わす光景がみられました。

多くの人の心にとって仏縁を戴くもっとも大きな機会が葬儀の場であるだろう。しかし時代のなかで葬儀は簡素化の道をたどり、いまでは通夜や告別式などを行わない「直葬」も、都心部では、そう珍しくないことではなくなってきたという。

こうした葬制の崩壊の危機に思いを寄せた僧侶らによって、崇敬区域内の組や寺院でも、近年わずかながらあるが、幾つかの活動がなされるようになってきている。

去る2月19日、当別院に於いて開かれた「声明儀式作法研修会」も、その一つと言えるかもしれない。

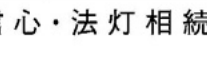
講師に、前堂衆一鷹の菅生考純師をお招きし、「葬儀のお勤め」をテーマに、儀式執行の姿勢や作法について指導いただいた。

はじめに、日本の葬制史の

大きな流れをつかむ講義があり、その後、長い時間を割いて、そうした歴史を経て形となった現代の大谷派の葬儀の、実践的な指導があった。

「儀式」という考えを「荘厳」という考えに変えていってほしい、と語る師の言葉を、どう受け止め、いかに表現して行くか。参加者それぞれに課題が与えられた貴重な集いであったように思われる。

熱心な研修



熱心な研修

青空市場に届く野菜

あるお母さんは「子どもに健康な赤ちゃんを生んでもらいたい、それが今、私の生きる力です」と話され、一同涙の出る思いであった。

二日目は、南相馬市にある原町別院で院代木ノ下秀昭氏より別院の歴史と、原発から23km地点にある南相馬市の現状をお聞きした。氏の「子どものいない町に復興などない」との言葉に、真の復興とは何かを教えられた。

最後は、真行寺住職佐々木氏の「福島を忘れないで下さい」を胸に福島をあとにした。

「わすれまい福島」

岡崎教区 2013年度「原発問題学習会」

立春も過ぎた、2月6・7日、原発事故から3年目を向かえようとする今、「原発問題学習会」が被災地において開催され、教区から19名が参加した。

今もおお、放射能汚染の中での生活を余儀なくされている人々の声を聞く中で、私たちにできることは何か、共に原発問題を学ぶ機会とした。

一日目は、二本松市の真行寺を訪れ「放射能から子どもたちを守りたい」そんな思いのお母さんたちの集まり、「ハレンジャー」の方からお話を聞いた。

汚染されていない安全な野菜を定期的に提供する青空市場の開催や、除染作業など、みな悲しみ、絶望の中でも仲間との絆で力強く活動されていた。子ども達は未だに屋外での遊びはできず、食品を見れば「お母さん、これ毒入っていない？」と聞く、そして、

「お経やお聖教の本質を伝えていくには、仏事の形を変えていく必要があるのではないかとお経を朗読する意義を話され、日本語訳された阿弥陀経や正信偈を朗読された。

質疑応答の時間では、普段の法事の式次第や、寺を身近に感じてもらう

去る1月25日に安城市歴史博物館にて第4回松平シノブジウムが開催された。

今回は、三河一向一揆を題材に勃発から450年を経て改めてその本質を問う検証研究を各々の立場・視点で問題提起がなされた。

まず、東京都立大学名誉教授の峰岸純夫氏が三河一向一揆の発生事情や当時、矢作川流域に勢力を張っていた石川一族との関連について記念講演を行った。

続いて、3名のパネリストが基調報告を提言された。

中京大学教授の村岡幹生氏は徳川家康の立場から一揆を考察し、同朋大学准教授の安藤弥弥氏は三河本願寺教授の「寺内」の研究を中心とした歴史像の検証を課題とされた。

大谷大学講師の川端泰幸氏は織田信長側の視点で、石山合戦期の一向一揆観を

検討し戦国一揆と権力者の特性を語られた。



# 小学二年生の社会学習 安楽寺を訪問

西尾市の三和小学校二年生の児童70名が、昨年12月11日、学校教育の一環である「生活」の時間に、第8組・安楽寺を訪れた。

「地域を探索して地域を識り、故郷に親しむ」ことを目的とし、これまでも近隣の佛寺や神社等を訪ねて学習している。

この日は、住職が公務出張で留守のため、坊主さんが御本尊前に行儀よく正座し、両手を合わせてお参りした児童であった。

この後、堂内や墓地に出てスケッチをしながら、お寺は初めてという児童もいたが、皆が結構楽しんで見ることが見受けられ、意義深い社会学習になったものと思われる。帰途の挨拶をする、次の世代を担う児童の晴れやかな表情が印象的であった。



坊主さんの話を聞く子ども達

## 人間模様 その13

赤羽別院や崇敬寺院に限らず、時には尾張や東三河地区のあちこちのお寺の法座や勉強会に、揃って足を運ばれる篤信家夫妻・第11組正念寺ご門徒・安城市城ヶ入町にお住まいの岩崎博幸・キヨ子さんを訪ね、長年の間法生活を通して感じた思いについて、お話を伺いました。

「開法に通われるきっかけは何だったのですか。20年程前になりますが、町内のお寺の住職から「報恩講の助音のための和讃講に参加しませんか」の声かけを頂き参加したのがきっかけです。以来、車中から目にした法会案内で、この先生のお話は聴いたことがないと思うと、行ったことのないお寺にも飛び込みで訪ねるようになり、次第に増えました。」



微笑みながら語るご夫妻

「今は、掲示板を見たりお誘いを頂くと、とりあえずカレンダーに書き込みますが、お寺の行事は日程が重なることも多く、家内と二人で今日日はどちらに？」などと相談して決め、いつも一緒に出かけます。

「仏法聴聞ありき」の日暮らしですね。

聞いても、解ったのか解らないのかさえ、良く解らないような事ですが、家で夕食を

食べながらその日の法話の話をしている、同じ話を聴いてきたのに、二人の受け取り方が違ったりしますが、その事を議論するのも楽しみの一つです。

正直言って、法話を午前、午後聴講するのは疲れますし、難しい話も多いです。でも、解らない話を聴いても無駄ではないと思います。

「参拝者が次第に減少する事が課題になる昨近ですが、「毛穴から入る」という事を聞きますが、それは本当だと思いません。解らなければ解らないで、極論すれば、寝ていてもそこに身を置くだけで何か違う気がします。

勿論、最初は私も「毛穴から入る」など、そんなバカなと思っていました。最初から自分で考えても結局は無駄です。先ずは、お寺に出掛けて聴聞する事です。

また、初めてお参りするお寺でも気持ちよく迎えて下さるので、今日はこの寺、次はあの寺と二人で聴聞に通わせて頂けるのです。」

## 本廟奉仕・二話



### 清掃奉仕と勉強会

第12組・門徒会



御影堂縁側の掃除

昨年12月11・12日、第12組門徒会では本廟奉仕が実施されました。一行13名は、親睦を兼ね東本願寺の同朋会館に宿泊したが、ここでは食事の配膳や布団の上げ下ろし、清掃等身の回りの事を自分達で行うため、誰かがしてくれている普段の生活の有難さを実感した次第です。

飯阿弥陀堂と御影堂に参拝し、清掃奉仕では御影堂縁側の雑巾がけをしました。この後、親睦聖人のお伝え下さったお念仏の教えとその歴史等を、本山教導よりお話しいただきました。

法話と座談会では、お寺との関わりの中で感じていることを話しましたが、「これは一住職の話は難しい。もう少し解り易い話をして欲しい」「みんなで思ったことを気軽に話せる場がつかれないか」等の意見が出されました。

また、「昨今では自宅で親を看取る事が減り、深い悲しみに接することが少なくなったのでは」ということが話題となり、仏法に学び、人間として生きるうえでどの課題となりました。

### 元気いっぱい上山奉仕

第14組「心の元氣塾」

第14組では、平成七年の本山指定推進員養成講座を受け継ぎ、青壮年層の教化を目的とする「心の元氣塾」が毎年開催されている。

今年度は、同朋会館教導稲前恵文師を講師に招き、敷異抄をテキストとし「おとくがいつぱい」と題し、三回がいつぱい」と題し、三回の講座が地元で開催された。

更に、1月25・26日の二日間、講座の更なる充実を期した真宗本廟奉仕には9名が参加した。

地元での講座では、「共に語り合う時間」が充分にとれなかったことを反省し、上山奉仕では一泊二日という短い時間の中で講義と座談に重点を置き、全員に発言の時間が与えられ普段と



渉成園での奉仕

## 左右田師の節談説教

第10組・瑞玄寺報恩講



名調子！左右田師の節談説教

昨年10月15日、八ッ面山の麗の竹林に見守られるかの如き瑞玄寺の報恩講に、親鸞聖人のみ教えにお出遇いしようとして、大勢のご同朋に交ってお参りしました。

背すじがピンと伸びるような厳かな動行に続いて、第2組順念寺住職・左右田智世師の節談説教の澄んだ声が本堂に響きわたりました。

「我が前に道はない。歩んだ後に道はできる」繰り返しの節談の名調子で、過去を振り返り、悩み考えたことを無駄にせず、人間として生きることに価値を見失わないように悟す有難い法話でした。

このご縁に出遇えたことに感謝し、来年もまた是非お参りしたいと考えています。

※匿名希望のご門徒さんからご寄稿いただきました。

法衣 / 袈裟 / 打敷 / 念珠 / 幕 / 記念品

**京** 合資会社 縫源法衣店

真宗大谷派 法衣・御稚児貸衣装

〒460-0015 名古屋市中区大井町1-39  
TEL (052) 321-4965  
FAX (052) 323-9559

創業100年

**西尾心月ホール**

ISO 9001:2008 西尾市住崎5丁目90番地

合資会社 **澤村**

本店 0563(59)6111  
本町店 0563(57)2733  
FAX 0563(59)6876

問い合わせは ☎0120-19-6111  
「心月の会」会員募集中

日本料理 **魚寅**

元祖 西尾の観茶めし

〒445-0894 愛知県西尾市上町業師前1-10  
TEL 0563-57-3044 FAX 0563-54-0334 ☎0120-01-3044  
http://www.katch.ne.jp/~uotora/

■営業のご案内■  
昼の部 午前11:00～午後2:00 (オーダーストップ午後1:30)  
夜の部 午後5:00～午後10:00 (オーダーストップ午後8:30)  
定休日毎週木曜日

年忌法要等の料理、仕出し、お弁当の注文を承ります。



